



いとけなき

吾子の笑まひに

いやされつ

子らの安けき

世をねがふなり

今上天皇

(皇太子殿下時お歌)

『皆さんと歩いて繋ぐ伊勢参り』

一 出陣式

令和最初の年は九月になっても暑さが続いていた。しかしその日は朝から雲が空を覆い、雨の心配はあったものの気温が下がり過ごしやすくなった。いつもならまだ参拝の人もまばらな午前八時、伊勢山皇大神宮の境内に続々と集まった人は約百人。これから始まる「皆さんと歩いて繋ぐ伊勢参り」の出陣式にはせ参じた人たちだ。鮮やかな赤色の半纏が配られ、早速袖を通す。白地に赤で横浜の景観を描いた手ぬぐいは鉢巻のように頭を覆う。小さな木札を首から掛ける。「なかなか似合うね」「寸法もぴったり」などと口々に唱えながら、揃いの出で立ちに身を包んだ皆々は、昂る気持ちを確かめながら式の始まりを待っていた。

伊勢山皇大神宮は令和二年に創建百五十年を迎える。幾つかの記念行事が計画されるなか、嚆矢となるのが、これから



創建150年記念事業『皆さんと歩いて繋ぐ伊勢参り』



応援団の激励



出陣式

始まる「皆さんと歩いて繋ぐ伊勢参り」だ。明治初年、幕末の開港により小さな海辺の村から一躍世界に向けた開港場となった横浜は、日々拡大成長を遂げていた。新しい港町に相應しい守り神として、町を見晴るかす丘の上に創建されたのが、この神社だ。近くにあった伊勢の小祠を遷し社殿も新営して祀った。以来、市民の心の拠り所となり、都市横浜の発展を見守り続け、百五十年が経過しようとしている。

その間、震災や戦災などの苦難もあった。今日、横浜は人口三百七十五万人、日本第二の大都市である。昨年には、新本殿が竣工した。これは平成二十五年式年遷宮の翌年、伊勢神宮の古殿舎を下賜されたものだ。二十年間伊勢の聖地にあった材は、ほんの少し表面を削ると、まばゆい黄金色の木肌を顕した。檜の芳香を漂わせる佇まいは、ここに鎮まる御祭神天照大神の御神威を感じさせる。

百五十年という節目を迎えること、新しい社殿を下さったこと、そのお礼にと神宮をお参りする。それも横浜から伊勢



伊勢山皇大神宮～戸塚（天王町駅前）



伊勢山皇大神宮出発

までの四百八十キロメートルを歩いて行こうというものだ。

「旅路の安全を祈るさまをお聞き届けください」と齋主が神前に祝詞を奏上した。「歩くことは祈ることだ。無事を祈る」と役員が激励し、「奮え、奮え、（フレーフレー）」との大声と拍手に送られて一行五十人が出発した。

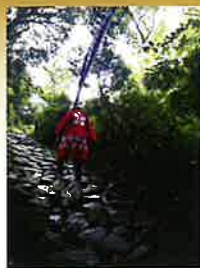
「伊勢山皇大神宮創建百五十年」と染め上げられた五色の幟旗を押し立てて老若男女、十か月児から九十三歳までが道路を歩き始めた。近頃、歩く集団は珍しくないが、この出で立ち是一段と目立つ。沿道から声がかかる。「どちらまで?」「伊勢まで行きます」「すごいね、頑張ってる」。旧東海道保土ヶ谷宿を通り権太坂で上り坂が続くと息が上がり始め汗を拭きながらとなる。武相国境を越えて戸塚宿にて当日組は解散。本隊はそのまま歩いて茅ヶ崎で最初の一泊。別動の三人は旗一本を持ち、赤い半纏のまま鶴岡八幡宮を参拝し御朱印を受けた。昔ながらに諸国一宮ほかの名社を参拝していく計画だ。



創建 150 年記念事業『皆さんと歩いて繋ぐ伊勢参り』



小田原～箱根（箱根旧街道）



茅ヶ崎～小田原（茅ヶ崎駅前）

二 箱根山

本隊は、三十代の男性神職二人に加えて神社職員数人が交代で一緒に歩く。区間によっては市民の方も参加する。できるだけ多くの皆さんと一緒に歩いてもらおうという狙いだ。共通の体験をすることで気持ち繋がる。

出発三日目で箱根路を登る。天下の険には風が強く吹き、石が濡れていて滑りやすかったが、若手中堅の職員男女が日頃の奉仕で培った体力精神力で登りきる。湖畔の箱根神社に参拝。翌日は一般参加の人も増え十人余りで静岡県側へと下る。霊峰富士が秀麗な姿を見せている。十五キロメートルほどを歩いて三島大社に参拝。湯茶で歓迎いただく。「昔から旅人は箱根路の無事を祈り、感謝するのが当社」との説明に実感の納得をする。

このようにして、本隊一行は人が適宜代わりながら西へ西へと歩みを進めた。

静岡、浜松、豊橋。名古屋港から七里の渡しは舟を利用し



箱根～沼津（箱根関所）



箱根～沼津（箱根旧街道）



て桑名に到着。そこからは伊勢街道を歩いて神宮を目指した。

三 明治初年

伊勢山皇大神宮創建は明治三年である。東海道を歩きとおしての伊勢参りといえは江戸時代の話と思いがちであるが、明治になってもしかばらくは江戸期同然であった。明治十三年に現在の青葉区から伊勢参りをした人の記録によると、大部分の行程は徒歩であったが、一部開通直後の汽車に乗り、馬車や人力車も利用している。東海道本線の全線開通は明治二十二年のことであり、以降は鉄道の旅へと一変する。昭和十一年には「皇太子殿下御誕生奉祝記念横浜市小学校伊勢参宮団」が二泊三日で専用列車を利用している。その皇太子殿下は今、上皇様となられ、私たちの旅行には新幹線や高速道路が当たり前になった。

令和の今日、伊勢まで二十日間歩き続けてお参りする意味は何なのだろう。



創建 150 年記念事業『皆さんと歩いて繋ぐ伊勢参り』



由比～興津（薩埵峠）



由比～興津（薩埵峠）

ひとつは、創建百五十年にあたり当時と同じ旅をして時の流れをかみしめる、ということだ。もう一つは、歩くことによって、身体への負荷や自然との対話をして、気持ちを含め、その心をもって多くの人と繋がる、ということだ。

昔の伊勢参りは「講」という仲間の代表者が順番に送り出された。歩く本人だけでなく皆の参宮だったのだ。今回令和元年の伊勢参りにもその精神は引き継がれた。神社、関係団体・企業などの応援があった。全行程を歩いた二人に加え延べ百四十人が出来る範囲、可能な区間で同行した。その部分では新幹線や高速道路も使った。現代らしい繋がり方と言えるだろう。

四 満願成就

十月十一日、横浜を発って二十一日目。伊勢街道を歩いてきた一行と前日バス二台で到着した五十人は外宮で合流。内宮までの約五キロメートルを歩いた。五色の幟旗、揃いの赤



浜松～白須賀（浜名湖）



日坂～見付（袋井）

い半纏、白い鉢巻は出陣式から変わらない。坂道があるのも同じ。高齢ご夫婦も若い人に支えられて内宮に到着。玉砂利を踏みしめつつ正宮へと進み、御礼と奉告の正式参拝をして、神楽を奉納した。

「満願成就」——天候にも恵まれ、計画どおりに行事は遂行できた。出発時も到着時も台風などが心配されたものの中二十一日間、影響は受けなかった。何より事故怪我病気がなかったのが幸いであった。御神徳のおかげである。

遡ること一年半前、行事の発案者はかつて一人で横浜から伊勢までを歩いた経験を語った。神社を挙げて計画を練り、担当二人だけでなく全職員が代わる代わる一緒に歩くこととした。日頃から伊勢山をお参りする人たちや一般にも参加者を募集した。諸会社に協賛を呼びかけ御協力いただいた。報道機関には取材をお願いして新聞記事や放送になり多くの人と繋がった。歩いた道筋で声をかけてくれた人たち、お参りした諸国十一社でも共感と励ましの言葉をいただいた。沿道



創建150年記念事業『皆さんと歩いて繋ぐ伊勢参り』



津～松坂（伊勢街道）



名古屋港～四日市（桑名）



箱根神社
(9月23日)



寒川神社
(9月22日)



鶴岡八幡宮
(9月21日)



小國神社
(9月28日)

皆さんと
歩いて繋ぐ
伊勢参り
奉告参拝神社



富士山本宮浅間大社
(9月25日)



三島大社
(9月24日)



熱田神宮
(10月4日)



篠島神明神社
(10月2日)



砥鹿神社
(10月1日)



都波岐奈加等神社
(10月6日)



真清田神社
(10月6日)



創建 150 年記念事業
『神輿渡御』『流鏑馬』
令和 2 年 5 月 17 日 (日)

